

へりくだる者は高められる

ルカ14:1、7~14 / 李正雨師

私は今週の説教を準備しながら学んだ日本語の中に「名だたる顔ぶれ」という言葉があります。名だたる顔ぶれのミュージシャン、名だたる顔ぶれの起業家、名だたる顔ぶれの選手などの意味として使われているこの言葉を見て、本当に面白い言葉だと思いました。有名な人々、超大物の人物のことを指しているこの言葉は、人間の尊敬とねたみ、羨望と欲望などをそのまま表わしているからです。多くの人は名だたる顔ぶれになるようにと願っています。自分の分野で有名な人、認められる人になりたいのでしょう。もちろん、「私はそんな人ではない」と言っている人もいないわけではありません。しかし、誰でも心の中には、認めについての欲求があります。これは、子供たちの中にも見つけることができます。最近、うちの三男はブロックを持って遊んでいます。ブロックでロボットや飛行機や恐竜などを作っています。そしてブロック作りが出来上がると、遊ぶ前に親のところを持ってきて自慢します。自分が作ったものを褒めて認めてほしいということでしょう。これだけではありません。他の子供たちも学校で100点を取ったとき、幼稚園で褒められたとき、家に帰ると、自分のしたことについて話します。自分の業が目上の人に認められ、他の人に知られるようにと願うのです。このように認めというものは、誰にとっても重要なことであり、みんなが望んでいるものだと思います。今日の福音書では、この認めに関する言葉が出ています。御言葉の背景は食事の場ですが、イエス様はその場で真の認めが何なのか、何が神様から認められるのかを教えてください。まず、今日の福音書の背景から調べてみましょう。ルカによる福音書14章1節の言葉です。「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。」

今日の福音書は、イエス様が食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったと書かれています。それで私たちは、今日の福音書の言葉が一般的な食事の場で起こったことだともうかもしれません。しかし、この食事の席は、一般的な食事の席、美味しい物を食べるための席ではありませんでした。1節でのファリサイ派の「ある議員」という言葉は、原語で「アルコン(ἄρξων)」と書いてありますが、この「アルコン」という言葉は、指導者や指導者層の人物を意味する言葉です。つまり、イエス様は、ただ食事のためにファリサイ派の議員の家に入ったわけではなく、指導者級の招待を受けて食事に行かれたのだと見ることができます。そして、当時の会堂の文化の中には、集会が終わると、会堂の指導者層の人々が会堂のゲストまたは説教者を招待して、自分の人々と共に食事をする習慣がありました。このような習慣から見ると、イエス様はゲストまたは説教者として食事の席に招待されたということが分かります。それも、多くの人の信頼と支持を受けていたファリサイ派の指導者の招待です。ですから、その食事の席には、多くのファリサイ派の人々がいて、彼らは、イエス様の様子をうかがっていました。

さて、その場では面白いことが起こりました。招待された人々がみんな上席に座るために空気を読んでいたのです。私の考えでは、誰でもその食事の場に招待されたのではないと思います。当時のファリサイ派の人々中でも、認められた人々がその場にいたでしょう。しかし、彼らは、お互いが上席に座るために顔色をうかがっていました。当時の食卓は、カタカナの「コ」のような形をしていたそうです。塞がっているところが上席であり、普通3人くらいがその場に座ることができました。そして、その上席には、主人や主人が特定した人だけが座っていました。簡単に言うと、上席は主人によってすでに決められた席だったのです。しかし、招待された人々は、自分が上席に座ることを望んでいました。皆が主人、すなわちファリサイ派の指導者から認められる人になりたかったのです。

これに気づかれたイエス様は、婚宴のたとえを言われます。このたとえが教えているのは、簡単です。自分自身で席を選んではいらないということです。皆様、何かおかしくないでしょうか。なぜイエス様は、食事の席に招待された人々の前で、このようなたとえをおっしゃったのでしょうか。上席を選んでいる彼らの姿が気に入らなかったからでしょうか。それとも、礼儀や世渡りを教えられるためでしょうか。もしこれが

イエス様の気持ちや世渡りに関したことであれば、福音書には記録されていなかったらと思います。それでは、なぜイエス様はこのようなたとえを語られたのでしょうか。私は、イエス様がその場に招待された人々、宗教指導者たちの心構えを指摘しておられたのだと思います。

宗教指導者として、ファリサイ派の人としてしなければならないのは、上席を選ぶことでも、自分たちの指導者に認められることでもないでしょう。先週の福音書の言葉のように、安息日の律法を守るために、平日に働くことを語りながら、18年間も病の霊に取りつかれた女を無視することでもないでしょう。しかし、当時のファリサイ派の人々、宗教指導者たちは、自分のことを見せるだけに力を尽くしました。自分たちがどんなに律法を守っているのか、自分たちがどれほど聖なる人なのかなどを現したかったのです。そして、これによって他の人から尊敬と認めを受けることを求めました。ですから、イエス様はこのような彼らの心構えと偽善を指摘するために、婚宴のたとえを言われたのです。神様は、自分たちのために上席を選ぶ人々を末席に送られるはずで、宗教指導者として当然しなければならないことをしない者たちは、自分の席を奪われ、恥もかくのです。上席はただ主人、神様の認めによって与えられるのです。だから、自分を高めてはいけません。自分の信仰を現わして、自分が上席を占める資格があると思っはいけません。見られて、現わしたこと、業と行いは、神の国では何の助けにもならないからです。

イエス様は11節でこう言われます。「**だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。**」この言葉は、謙遜しなさいという言葉とは少し違うと思います。神様の御前で積極的に自分のことを低くして、へりくだりなさいという言葉です。私たちの業や行いは、むしろ私たちに神様の恵みが与えられることを妨げるのです。もし自分自身である程度の上席は、選ぶ資格があると思うなら、神様の恵みはあえて必要ないと認めているのです。また、資格のない人々は、神様の恵みを絶対持つことはできないと思っているのです。ですから、私たちは神様の御前で積極的にへりくだらなければなりません。自分の高慢が神様の恵みを受けることを妨げないように、自分の考え方で神様の恵みを判断しないようにしなければなりません。それでイエス様は、もう一つのたとえを言われます。それは宴会を催すとき、返すことができない人を招待しなさいということです。13～14節の言葉です。「**宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いです。**」

この言葉に出てくる人々は、ファリサイ派の人々や宗教指導者たちとは全く違う人々です。それだけでなく、律法を守ることができる人でも、業績も積み重ねることができる人でもありません。当時は貧しさや障害を神様の裁きだと思っていたので、彼らは、身体的にも宗教的にも自慢することができない人々でした。しかし、イエス様はこのような人々を宴会に招待しなさいと言われます。これについては様々な理由があると思いますが、前の節の言葉と引き続き考えてみると、この招待は神様の恵みと関連があります。何も返すことができない人に与えられる恵み。これが神様の恵みであるということです。宴会を催す人は、自分に何も返すことができない人を招待することによって、神様の恵みが何なのかが分かるようになるでしょう。そしてこの招待は、後に自分の報いになるのです。マタイによる福音書6章4節の言葉のように、隠れたことを見ておられる神様が報いてくださるからです。

私たちは、毎週の御言葉や信仰の告白を通して、私たちの救いは恵みによるものだということを告白しています。これは、私たちのどんな業績も、私たちの献金や礼拝の出席や奉仕も、私たちの救いには何の影響も及ぼすことはできないということです。残念ながら自分を少しでも高めようとしている人、自分の業績と行為を自慢する人は、これを決して悟ることはできません。だからイエス様は、私たちにへりくだることを言われたのです。ただ自分を低くする人だけが神様の恵みを悟り、その恵みによって高められるのです。そして恵みによって高められた人々に、神様はご自分の国の上席を与えてくださるのです。恵みだけを求めてください。その恵みが私たちを救い、私たちのすべてのことを導いてくれるのです。神様が自分のことをへりくだって、恵みだけを求める皆様に、神様からの栄光を与えてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン